

ヘブル10:1-18; 「より良いいけにえ」 2025年2月23日

I. 歓迎とレビュー

A. おはようございます! おはようございます! カルバリーチャペル岩国へようこそ。

1. *新しい顔ぶれやオンラインストリーミングを歓迎する。*
2. 妻と結婚式のためにアメリカに行った後、ここ岩国に戻ることができてとても嬉しい。甥の結婚式の司式をさせてもらった。とてもいい天気、家族に会えて嬉しかった。

B. 皆さんが元気で、ヘブル人への手紙の勉強を再開する準備ができていることを祈りますが、その前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室に解散させましょう。

1. *(2nd礼拝; 聖書英語クラスの解散を忘れない)*

C. 子供たちが外に出て行くとき、私の不在中に説教壇を埋めてくれたケビン、ジェイコブ、アンドリューにほんの数秒だけお礼を言いたい。

1. ケヴィンは2週間前、マタイによる福音書5章から7章に記されているイエスの山上の説教を教えた。彼は公の信心の落とし穴について教え、私たちの行為と背後にある動機に注意を向けた。見てもらうためにささげるのか、聞いてもらうために祈るのか、本当の自分よりも神々しく見せるために断食するのか。それは偽善に対する大きな警告であり、主を心から礼拝することへの大きな励ましであった。
2. そして先週、ヤコブは詩篇57篇を題材に、真理の神について御言葉を語った。彼は、神が本当はどのようなお方なのか、そして私たちは神が主張するお方であると本当に信じているのか、私たちの理解に挑戦してくれた。私はこの人の教えを聴くことができ、また彼らが御言葉を通して皆さんに宣教するために、自分の居

心地の良い場所から一步踏み出していることに励まされ、とても祝福された。

3. アンドリューは水曜日の夜、私の代役を務め、民数記の行進を続けてくれた。
  4. 彼はみことばを明瞭に述べ、私たちの生活に適用できる素晴らしい個人的な適用を数多く提示してくれました。今回もまた、このような神の男たちが立ち上がって奉仕してくれたことを祝福し、神がこのカルバリーで彼らを用い続けてくださることを楽しみにしている。
- D. さて、今朝はヘブル書の学習に戻ります。「ヘブライ人への手紙」を読んでから数週間が経ちますが、皆さんは私たちが焦点を当てたことをあまり忘れていないでしょうか。ヘブル人への手紙の著者は、イエス・キリストの優越性と優位性を論証しています。
1. 彼は、迫害とキリストへの新しい信仰への挑戦を経験していたユダヤ人のグループに手紙を書いている。
  2. 著者は、ユダヤ教に立ち戻る誘惑に駆られている人々に、そのような行動の愚かさを示すために書いている。彼は彼らにこう勧めた。

進路を変えるのではなく、進路を維持し、イエスに従い続け、救いのためにイエスとその十字架上の完成された御業に信頼を置き続けるためである。

3. 本書を通して、著者はイエスが誰よりも、何ものよりも偉大であることを示してきた。
  - a. イエスは預言者たちよりも偉大である。天使たちよりも偉大だ。より良い啓示と安息を与えてくださる。
  - b. 彼は、アロンの家系やレビ人の祭司職ではなく、メルキゼデクの家系という、より優れた祭司職の出身である。彼は、祭司として主に仕えた他の誰よりも優れている。
  - c. イエスはより良い契約ともたらした。永遠への希望だ。昔の祭司たちが仕えていた地上の聖所ではなく、天上の聖所である。
  - d. イエスは何にも勝る、誰よりも優れた方であり、イエスが私たちに与えてくださるものは、私たちが望むもの、想像するものよりも優れている。
4. さて、今日の学びは、もう少し同じような内容になるだろう。テキストはヘブル人への手紙10章1節から18節までである。このテキストの中で著者は、キリストの犠牲と、キリストの犠牲がいかにより優れた犠牲であるかを語ることによって、その議論を頂点に導こうとしている。
5. 私たちの研究のタイトルはまさにそれだ。
6. 今朝、お手元に聖書があり、すでにヘブル人への手紙第10章を開いておられることを祈りますが、もし聖書をお持ちでない場合は、遠慮なく手を伸ばして私たちの聖書を借りて、ヘブル人への手紙第10章に進んでください。

7. ヘブル10章に入ったら、神と神の聖なる御言葉に敬意を表して、立ち上がっていただきたい。

8. 私が持っている聖書から、本文の全文を読み上げます。自分のバイブルにそって頑張ってください。ヘブル人への手紙の著者は、10章1節で次のように書いている。

## II. イントロ

A. ここ10章の最初の部分で、著者はキリストの優位性を論証し、その頂点に達する。ヘブライ人への手紙には、二つの主要な部分がある。

1. 第1章は、ここまで私たちが取り上げてきた内容である。第1章の冒頭から第10章の半ばまで、本書はキリストの至高性を扱っている。

2. 10章19節から本書の終わりまでの第2節では、信仰の優位性を扱っている。

B. この10章の最初の部分を学ぶにあたり、著者は、キリストの犠牲に関するキリストの優位性に焦点を当てようとしている。

1. 本文を読み、主張を記すうちに、キリストの犠牲がこれほどまでに優れているのは何なのかが見えてくるだろう。
  2. 著者が提示するケースは、キリストのいけにえは、モーセの律法の一部であり、この本が書かれた当時、過去1000年以上にわたってユダヤ人の生活の一部であったいけにえよりも優れている、というものである。
- C. 著者は10章の冒頭で、イエスのいけにえの方が優れているという考えを裏付けるために、2つの異なる対照を述べている。私と一緒に1-4節をもう一度見てみよう。

III. ヘブル10:1-4;

A. 1節の冒頭で、著者は影と像を対比している。

1. ローマ7章によれば、律法は聖なるものであり、正義であり、善である。(ローマ7:12)
2. 詩篇の作者は、主の律法は完全であると宣言している。(詩篇19:7a)
3. しかし、律法は影に過ぎないと著者は主張する。律法は、良いことの影に過ぎない。それは影であって、その姿そのものではない。
  - a. 影や種類、コピーや伏線があるという考え方は、作者が提示する新しいものではない。
    - i. 8章で、著者は地上の祭司たちがいかに天のものの模写と影に仕えていたかを語った。(ヘブライ8:5a)。彼らが仕えた幕屋とその備品は、すべて天にあるものの写しであり、影に過ぎなかった。
    - ii. 9章で、著者は地上の幕屋の働きと、ベールが最も聖なる所への道をふさぎ、それが神の臨在への道がふさがれていること

の象徴であることを語った(ヘブライ9:9a)。

- b. 私たちは、旧約聖書の律法に記されている多くの事柄が、来るべきもの、より偉大なもの、まさに何かのイメージを指し示すためのものであったことを理解している。
  - c. 律法は重要であり、神の目的にかなうものであったが、それは来るべきものの予兆にすぎなかった。律法は、神がすべての人に注目してほしいと望んでおられるものの姿そのものを示す伏線だったのだ。
4. そして、そのイメージとはイエス・キリストである。なぜわかるのか? 聖書がそう語っているからだ。
- a. コロサイの信徒への手紙の中で、使徒パウロはこう書いている。"食べ物や飲み物、祭りや新月や安息日について、だれもあなたがたをさばかないようにしなさい"(これらはすべてモーセの律法に由来するもので、パウロは続ける)。 (コリント2:16-17)。
  - b. イエスは現実であり、実体であり、すべてのOT律法が指し示していたものである。

- c. 律法は完全であり、聖なるものであり、正義であり、善である。そして律法は完全で、聖なる、公正な、善なるものの姿そのものを指し示している。
- d. コロサイの信徒への手紙1章は、キリストについて「見えない神のかたちである」(コロサイ1:15a)と述べている。
- e. ヘブライ人への手紙の中で著者は、イエスは神の栄光の輝きであり、神の御姿の表れであると述べている(ヘブライ人への手紙1:3a)。(ヘブル1:3a)
- f. イエスは肉体を持つ全能の神である。この方こそ、律法のすべてが焦点なのだ。ガラテヤ3章によれば、律法は私たちがキリストに導くための家庭教師であり、校長であった。(ガラテヤ3:24a)
- g. 律法の目的は、私たちがイエスに導くことだった。律法は、神の御子の姿そのものの影であった。ですから、律法と律法のいけにえは、キリストとキリストがもたらすいけにえの伏線にすぎなかったのです。
- h. 本物が目の前にあるのに、その影に注目する人はいない。
  - i. あなた方軍人の家族の多くは、配備や演習、その他の任務のために愛する人を遠く離れた場所に連れて行くため、愛する人との長期間の別離に対処している。
  - ii. そして、愛する人が家族のもとに戻ってくる前に、あなたや家族を励まし、愛する人の帰還に家族を興奮させるような兆候や影が現れるかもしれない。
  - iii. 基地は飛行隊や部隊の帰還を歓迎する看板を立てる。そして家族は、愛する人の帰還を心待ちにするよう出来事や影、ヒントに興奮する。
  - iv. その影は勇気づけられ、興奮させられる。しかし愛する人が到着したとき、誰も駆け寄ってその影を掴もうとしない。彼らは駆け寄っ

て、あなたが興奮していた個人をつかむのだ。

- v. 、イエスは律法の実体であり、律法によって予告された存在である。律法はイエスを指し示していた。だから、イエスが現場に到着すると、律法は影に過ぎなくなった。本物が現れたのだから。

B. さて、この最初の4節で、著者は2つのコントラストを提示したと言った。一つ目は、影と像の対比である。2つ目の対比は、罪を覆い隠すことと、罪を取り除くこととの対比である。

1. 1節によれば、律法は決して「毎年捧げ続けるこれらの同じいけにえで、近づく者を完全な者にする」ことはできなかった。そうであれば、捧げられることがなくなっていたのではないだろうか。"

2. そうだ。もし律法のいけにえが主に近づく者を完全な者にするのであれば、もはやいけにえは必要ない。犠牲は必要なくなる。
3. "礼拝者たちは、一度清められたら"、あるいは、"清められた"と訳してもよい。もし彼らが罪からきよめられ、清められたなら、もう罪を思い出すことはないだろう。しかし、そうではなかった。
4. 3節によれば、それらのいけにえには、毎年罪を思い起こさせるものがある。
5. これは、毎年贖罪の日に行われる行事と活動を指し示している。神は毎年、贖罪の日が大祭司が犠牲の儀式を行い、自分とイスラエルの子供たちの罪を贖うように定めておられた。
  - a. 贖罪の日までの数日間は、断食し、自分の罪についてよく考えることが求められた。贖罪の日の10日前には、ラッパの祭りがあった。これはユダヤの新年を迎えるためであり、贖罪のいることに人々の注意を喚起するためであった。それは準備の時であり、罪を告白する時であり、神があなたのために大祭司のいけにえを受け入れるかどうかを待つ時であった。
6. 贖罪の日には、大祭司だけが雄牛の犠牲を捧げ、その雄牛の血を取り、幕屋のヴェールの奥にある至聖所に入る。
  - a. そしてそこで、契約の箱を覆っていた慈しみの座に雄牛の血を振りかけ、自らの罪を贖った。
  - b. そして、血を7回振りかけた後に出て行き、イスラエルの子供たちの罪を贖うために、供え物としてヤギを捧げる。そして、その山羊の血を持って、再びベールを越えて至聖所に入り、雄牛の血の時と同じように、契約の箱の上に置かれた慈しみの座に山羊の血を振りかけた。
  - c. この年に一度の生け贄は、神が大祭司とイスラエルの子供たちに罪を贖わせるために定めた方法だった。
  - d. ヘブライ語で"贖罪"という言葉は"カファル"という言葉で、文字通り"覆い"を意味する。これは、頭を覆うための帽子のことである。雄牛の血と山羊の血は罪を覆い隠すことしかできなかった。
  - e. 4節にあるように、取り除く能力や力はなかったのだ。4節には、"雄牛や雄やぎの血が罪を取り除くことは不可能だからである"とある。
7. そうして毎年毎年、民の思い起こさせることがあった。大祭司がこの儀式の一環として雄牛を殺し、山羊を殺すたびに、民は自分たちの罪の問題を思い起こすことになる。

- a. 彼らの良心は、彼らの罪のためにヤギが死ななければならなかったことを思い知らされることになる。彼らの罪が取り除かれたのではなく、覆い隠されただけなのだ。そして、雄牛や山羊の血は罪を覆い隠すことしかできなかったの  
で、供え物は絶えず捧げられなければならなかった。
- b. 律法は、罪を取り除く希望も、罪を自覚する希望も与えな  
かった。その代わりに、律法は絶えず彼らの思い出させた。犠牲  
が捧げられるたびに、彼らの罪は常に目の前にあった。

8. しかし、イエスの到来とその犠牲によってすべてが変わった。

- a. 使徒パウロはローマの信徒への手紙の中で、預言者イザヤ  
の言葉を引用し、メシアが現われるときにイスラエルがど  
のように救われるかを述べている。それは、わたしが彼ら  
の罪を取り除くとき、彼らとわたしの契約が結ばれるため  
である」(ローマ11:26-27)。(ローマ11:26-27)
- b. 神は、救済者であるメシアが来て、罪を覆い隠すだけでなく  
、罪を取り除く、つまり罪と罪の意識を完全に取り除く時に  
ついて語られた。
- c. 洗礼者ヨハネはイエス・キリストについてこのことを理解し  
ていた! 世の罪を取り除く神の小羊を見よ。(ヨハネ1:29)

9. そして私たちは、罪の覆いと罪の除去という驚くべき対比を目  
の当たりにする。

- a. 律法とそれに付随するいけにえは、常に罪を思い出さ  
せるものであり、罪を覆い隠すものでしかなかった。
- b. しかし、イエス・キリストがこの地上に来られ、カルバリの  
十字架の上でご自身の命を捧げられたのは、罪を取り除  
くためであった。

c. 雄牛や山羊のいけにえは絶えず私たちの思い起こさせるが、  
イエス・キリストのいけにえは主の恵みを思い起こさせる。  
イエスがパンと杯に与った時、あなたの罪を思い起こしてこ  
れをしなさいとは言われなかった。

d. 律法は絶えず私たちに罪を思い出させるが、キリストは絶え  
ず私たちに救い主を思い出させる。罪を思い出すのではなく  
、救い主を思い出すのだ。

e. 十字架上で完成したキリストの御業に信仰を置くとき、私たち  
の罪は単に覆い隠されるのではなく、れ、完全に処理される。  
罪は取り除かれる。

f. 私たちは神の小羊の血で洗われ、罪の汚れは完全に取り除かれ  
る。前の章で述べたように、ヘブル9章では、イエスはご自身  
のいけにえによって罪を取り除くために現れた。(ヘブル9:26b  
)

g. 罪を消し去り、完全に取り除かれたのだ。

C. そして、その驚くべき真実と現実を考えると、私たちはイエスが  
より優れた犠牲である大きな理由の理解する。

1. イエスの犠牲は、実際に罪を取り除くので、より優れている。
2. 律法のいけにえのように罪を覆い隠すだけでなく、罪を完全に  
取り除き、東から西の彼方に投げ捨てるのだ。そしてその真理は、  
私たち一人ひとりを祝福するはずだ。
3. キリストの犠牲には、罪を完全に  
取り除く力がある。あなたと私  
を天の神の御前に入らせない障壁を  
取り除く力がある。
4. 罪は大きな問題だ。それは主と  
私たちとの間にある障壁だ。私  
たちの  
は、私たちが神から引き離した。  
しかし、イエス・キリストを信じ  
る信仰によって、私たちは罪を赦  
され、罪の汚れを完全に  
取り除くことができる。イエスと  
私たちのためのイエスの犠牲に  
よって、罪はすべて取り除かれる  
のだ。

D. では、勉強を続けよう。イエスがより良いいけにえであるもう一つの理由に注目しながら、5-9節を一緒に読みましょう。

#### IV. ヘブル10:5-9;

- A. ここでヘブル人への手紙の著者は、旧約聖書の詩篇を引用し、イエスがより優れた犠牲であるという説を支持している。
- B. 著者は詩篇40篇の6節から8節を引用し、イエス・キリストとその受肉、すなわちイエス・キリストが人としてこの世に生まれ、入られたときに当てはめている。
- C. この詩篇からの引用を読むと、主の心が見えてくる。主の御心が何であるか、主がご自分の民に何を望んでおられるかがわかる。
  1. この節には、犠牲と供え物、焼き尽くす供え物、罪のための犠牲が列挙されている。律法には、さまざまな理由で捧げられる数種類の供え物と犠牲が定められていた。罪の供え物、焼燔の供え物、交わりの供え物、穀物の供え物、飲み物の供え物、平和の供え物、波の供え物など、主を礼拝し、主を認めるためのさまざまな

方法があった。

2. しかし、これらのいけにえや供え物はすべて、神が真に望まれるものではなかった。神はそれらを喜ばれなかった。神は、人々が雄牛、山羊、子羊、その他の動物の血を捧げることを喜ばれなかった。
3. さて、皆さんの中には、"神が好まなかったり、望まなかったりしたのなら、なぜ神は人々にそれをするように命じたのだろうか?"と考える人もいるかもしれない。
4. 神のご意志は、神の怒りを鎮めたり、神を満足させたりする方法として、民が単に犠牲を捧げることに徹することではなかった。それはまったく違う。神はご自身の民との関係を望んでおられた。
5. 彼は彼らの心を求めた。しかし、彼らの罪は彼らを神から引き離した。そこで神は、キリストが来て彼らの罪を取り除いてくださるその日まで、人々の罪が覆い隠される道を造られた。
6. いけにえは、人々を神に近づけるための一時的な手段だった。しかし問題は、人々がいけにえと供え物を、神に近づくための手段ではなく、宗教的儀式や規則に変えてしまったことだ。
7. 聖書を通して、私たちは犠牲と捧げものに関する神の心を読んでいる:

- a. サムエル記上1章で、預言者サムエルはこう宣言している。「主は、焼き尽くす供え物やいけにえを、御声に従うことと同じように喜ばれるのですか。見よ、従うことはいけにえにまさり、聞き従うことは雄羊の脂肪にまさる。(1サム15:22)
- i. 神は民が神の命令に従うこと、神の言葉に従うことを望んだが、民は犠牲さえ払えばすべてがうまくいくと考えた。
- b. 詩篇51篇には、神がいかに人々の心を望んでおられるかが書かれている。神は、ご自分の前に砕かれ、悔い改める心を望んでおられる。詩篇の作者ダビデはこう宣言している。「あなたはいけにえを望まれません。いけにえは、砕かれた霊、砕かれ、悔いる心です。(詩篇51:16-17)
- i. その2節後、詩篇の作者はこう書いている。"そのとき、あなたは義のいけにえを喜ばれ、焼き尽くす献げ物と全焼の献げ物を喜ばれ、彼らは雄牛をあなたの祭壇にささげます"。(詩篇51:19)。
- ii. 犠牲の前に、捧げ物の前に、神は人の霊と心を求めておられた。自分の罪の重さを理解し、その罪によって打ち砕かれ、そして捧げ物を捧げることを望んだのだ。
- c. 預言者ミカは問うた、「わたしは何をもって主の御前に臨み、いと高き神の御前にひれ伏そうか。生後一年の子牛と燔祭をもって、主の御前に出ようか。主は、雄羊数千頭、油の川一万本で喜ばれるだろうか。わたしの初子をわたしの罪のためにささげ、わたしのからだの実をわたしの魂の罪のためにささげようか。(ミコ6:6-7)
- i. そして、主はあなたがたに何を求めておられるのか、ただしく行い、あわれみを愛し、自分の神と謙虚に歩むことである」(ミコ6:8)。
- ii. 繰り返すが、それは関係性のことであり、主とともに歩み、主に近づくことである。
- d. ホセアは主についてこう宣言している。"わたしはいけにえよりもあわれ

みを、焼き尽くす供え物よりも神を知ることを望んでいる。

(ホセ6:6)

- i. 神は私たちが神を知ることを望んでおられる。しかし、民は犠牲を、主への真の望みを欠いた心ない日課にしてしまった。
- e. アモス書には、まさにこのことが書かれている。わたしは憎み、あなたがたの祭日を軽んじ、あなたがたの聖なる集会を味わわない。あなたがたは燔祭と穀物の供え物をわたしにささげるが、わたしはそれを受け入れず、あなたがたの肥えた平和の供え物を顧みない。わたしは、あなたがたの弦楽器の旋律を聞かないからである」。(アモス5:21-23)
- f. イザヤも同じように宣言している。燔祭はもうたくさんだ。

雄羊の供え物と、肥えた牛の脂肪。わたしは雄牛の血も、子羊や山羊の血も喜ばない。あなたがたがわたしの前に現れるとき、だれがあなたがたの手からこれを要求したのか、わたしの宮廷を踏みにじるためか。もう無益ないけにえを携えるな。香はわたしには忌むべきものだ。新月、安息日、集会の招集-わたしは不義と聖なる集会に耐えられない。あなたがたの新月と、あなたがたの定めた祭りとを、わたしの魂は憎む。あなたが手を広げれば、わたしはあなたから目を隠す。あなたが多くの祈りを捧げても、わたしは聞かない。あなたがたの手は血で満ちている。あなたがたは身を洗い、身を清くし、あなたがたの行いの悪をわたしの目の前から捨てよ。悪をやめ、善を行うことを学び、正義を求め、压制者をそしり、父のない者を守り、やめめのために嘆願せよ。主は言われる、"あなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなり、深紅のように赤くても、羊毛のようになる"。(イザ1:11-18)

8. 犠牲や宗教的行為は、心と結びついていなければ何の意味もない。誠実に行われなければ。神はご自身の民を、親密になること、従順になること、神とともに歩み、神を知ることによって召された。犠牲はそのための手段に過ぎなかった。しかし、民は犠牲を心のない儀式や規則に変えてしまった。犠牲が本来の目的のために用いられていなかったため、神はそれを軽蔑された。人々は犠牲を、神への理解や神との関係を深めるためではなく、神をなだめるための手段として用いていたのだ。

a. 私たちは同じ罠に陥りやすい。教会に来て、歌を歌い、祈りを捧げ、什分の一と献金を捧げる。私たちは奉仕の行為を、神をなだめようとする手段として行うものに変えてしまうことがある。

- b. 神はあなたの無情な供え物を望んでいない。空虚な祈りも、不誠実な奉仕も、神は望んでいない。神はあなたを求めている。神はあなたとの親密で個人的な関係を望んでおられる。
- c. それが神の御心なのだ。神を知り、神の恵みと知識の中で成長すること。畏敬の念を抱いて、神の御前に謙虚に歩むこと。心から神を礼拝し、神があなたの内に置かれた神の霊の導きと導きに身をゆだねること。
- d. 心にもない宗教的な行いや奉仕が神をなだめすかしたり、神に喜んでもらえると考える罠にはまってははいけない。神は私たちの誰に対しても、そのようなことは望んでいない。

D. ここで特に詩篇40篇を引用して、著者は神がキリストのために用意されたキリストの体を持ち出している。

- 1. さて、興味深いことに、詩篇40篇を読むと、原文では神がいかにも彼の耳を開かれたかが語られているが、肉体を用意されたわけではないことがわかる。(詩篇40:6)。
- a. 聖霊の靈感の下、著者はこの部分をキリストと同じ文脈に収まるように解釈している。私の耳は

詩篇40:6にある "あなたは開かれました"とは、神が誰かを知り、御心に従って行動することができるようにされたことを表している。あなたは私の耳を開いて、私があるあなたの御心を知り、その御心に従うことができるようにしてくださいました。

- b. ヘブル人への手紙の著者はこのことをキリストのこととしているが、キリストは神の御心を知り、行うために開かれた耳についてではなく、神の御心を知り、行うために準備されたキリストの体全体について語っているのである。
  - c. 正確な引用は異なるが、文脈と意味は。それは、神が人を神の意志を知り、行動するように準備することである。
2. キリストが罪のためのいけにえとしてその身を捧げたのは、神のご意志であった。
- a. これは、あなたがたのために与えられるわたしのからだである。(ルカ22:19)。
  - b. ペテロ第一の手紙2:24には、イエスの体が私たちの罪を背負う方法として示されたことが書かれている。(1ペテロ2:24)
  - c. イエスの体は犠牲のために準備された。しかし聞いてほしい、このいけにえの準備が、単に民衆が侵害し操作したいけにえのシステムを修正するための最後の切り札として行われたものだと考えてはならない。
  - d. いや、イエスの体は、生け贄制度を混乱させるずっと前から、生け贄のために準備されていたのだ。黙示録13章は、キリストについて、「彼は世の初めから殺された小羊である。(黙示録13:8)
  - e. 神が天地を造られる前から、この世の土台が築かれるずっと前

から、キリストの体は犠牲のために準備されていた。

- f. 神の意志と神の計画は常に、御子を遣わして世の罪の罰を受けさせることだった。キリストの犠牲は、時の初めから神の意志だった。
  - g. そして、キリストは神の御心を行うことに全力を尽くされた。御父の御心に自らを委ね、私たちの罪のために十字架上で苦しまなければならないという意図と予知をもってこの地上に來られた。「そして、人の姿になられて、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順になられたのです。(フィリ2:8)
3. 本文の7節と9節にあるように、イエスは御父のみこころを行うために來られた。イエスは言われた。"神よ、見よ、わたしはあなたの御心を行うために來たのです"。
4. 主は、第一の契約であるモーセの律法とそこにあるいけにえ、すなわち古い契約を取り去られた。
- E. なぜイエスの方が優れているのか？ 端的に言えば、イエスの犠牲が神の意志であったからである。

1. 最初から、最終的にはキリストが来られ、古い契約を取り除き、新しい契約を樹立されるという計画だった。
  2. 罪のためのいけにえとしてご自身の命を捨てることによって、絶え間ない動物のいけにえをなくすこと。
- F. さて、本文を続けて、イエスのいけにえがより優れたいけにえであるもう一つの非常に重要な理由に注目しましょう。10-18節を一緒に読みましょう。
- V. ヘブル9:10-18;
- A. この節で著者は、祭司の継続的な捧げ物とキリストの一度捧げ物との対比を、さらに別の対比で取り上げている。
1. 10節には、私たちがイエス・キリストのからだを捧げることによって聖なる者とされたのは、神の御心によるものであると書かれている。
  2. このキリストの一度きりの犠牲という概念は、著者が新たに指摘したものではないが、彼が今一度強調しているものであることは間違いない。
    - a. 以前、**ヘブル**人への手紙第7章で、著者はイエスが私たちの完全な大祭司であることについて語ったとき、このような大祭司が私たちにいかにふさわしいかを述べた。この方は、聖なる、無害な、汚れのない方で、罪人から離れ、天よりも高くなられた方です。
    - b. ヘブル人への手紙9章で、著者はより良い聖所におけるイエスの働きについて語り、イエスが天の聖所に入られたのは、やぎや子牛の血によるのではなく、ご自分の勝ち得た血によって、永遠の贖いを得て、至聖所に一度入られたのである。(ヘブ9:12)。
- c. その後9章で、著者は天の聖所におけるキリストの一度きりのいけにえについて再び述べ、キリストが時代の終わりに一度だけ現れて、ご自身のいけにえによって罪を取り除かれたことを述べている。**(ヘブル9:26b; ESV)**
3. 犠牲の一回限りという性質が、律法の犠牲よりもはるかに優れているのだ。イエスのいけにえは、一度限りのいけにえであったからこそ、より優れているのだ。
- B. キリストの一度きりの犠牲は、私たちが信仰を置き、人生を築くものである。著者が罪のための一度きりの犠牲を強調しているこのテキストの最後の部分を見渡すと、その結果もたらされるいくつかの非常に重要な真理が見えてくる。
1. 11節と12節では、キリストの一度きりの犠牲のおかげで、私たちの救いに必要な業が完成したことが示されている。
    - a. 地上の祭司たちは、毎日いけにえをささげなければならなかったので、その仕事を終えることがなかったのとは対照的に、イエスは一度きりの完全ないけにえとしてご自分の生涯をささげられた。

父の右の座に着き、父の御心を完成された。

b. イエスは十字架上でこう叫ばれた。(ヨハネ19:30)

c. 私たちの救いの業、つまり私たちが救われる道を提供するためになされる必要があったすべてのことは、キリストの一度きりの犠牲において、また犠牲によって完成した。私たちに残されているのは、その完成された十字架の御業を信じることだけである。

d. それこそが十字架の力であり、御自身を捧げる一度きりの力なのだ。十字架は、私たちの救いのために必要なあらゆる働きを完成させた。十字架は完全であり、完全であり、完璧である。

2. 13節と14節では、キリストの一度きりの私たちの聖化をもたらしたことがわかる。

a. キリストが十字架の上でしてくださったことのゆえに、私たちは聖別されているのだ。聖別されるという言葉はギリシャ語で "hagiazō" といひ、文字通りには「清くする」「純粹にする」という意味である。この言葉は、キリストの一度きりの犠牲を信じることによって、キリストにおける私たちの立場を語るときに使われる。

b. キリストにある立場上、私たちは主の御前で清くされた。この聖めの業は、十字架に基づく業である。本文の10節を振り返ってみれば、私たちはイエス・キリストの体を捧げることによって聖別されたことがわかるだろう。

c. そして私たちの聖化は、永遠に続く完全な業である。14節には、「一つの捧げ物によって、聖別されつつある人々を永遠に完成されたからです」とはっきりと書かれている。それはあなたであり、私である。

i. 今、聖別される人々について語られているのは、信者の人生における継続的なプロセスについてではない。救われつつある人々が継続的に福音を受け入れることを語っているのだ。

ii. キリストを信じる時、私たちは聖別される。私たちは永遠に完全にされるのです。その意味がわかるだろうか？ 私たちの立場を向上させるためにできることは何もない。完全は完全であり、これ以上良くなることはない。

iii. さらに聖別されるために教会に行く必要もないし、もっと聖別されるために聖書を読む必要もないし、もっと祈る必要もないし、もっと奉仕する必要もないし、もっと献金する必要もない。その働きは終わったのだ。私たちは永遠に完全にされたのだ。

iv. 驚くべき真理だ。私たちは日常生活の中で、しばしば気づかないことがある。キリストにおける私たちの立場、立ち位置は決まっている。完成しているのだ。キリストの一度きりの犠牲がすべてを完成させたのだ。

3. 15-17節で、著者は再びエレミヤ引用し、エレミヤ書31章で預言された新しい契約に言及している。

a. 神がどのように私たちの心に律法を刻み、どのように私たちの罪と無法な行いを思い出さなくなるか。

- b. イエスの一度きりの犠牲のおかげで、あなたの罪も私の罪も、私たちの無法な行いも処理れ、永遠に償われ、二度と持ち出されることはない。
- i. 神が私たちの罪や無法な行いを覚えていないというのは、そういう意味である。神が私たちの知らないという意味で忘れるのではない。結局のところ、神は全知全能でありすべてを知っておられ、神が忘れることや神が知らないことはないのだ。神はすべてを知っておられる。
- ii. 主は彼らを呼び戻さないということだ。呼び戻すことはない。私たちの罪と無法な行いは、記録から抹消された。私たちは、神の御前で永遠に清く完全な記録を与えられたのだ。
- iii. イエスがカルバリの十字架にかかられたとき、神は私たちの取り、それをイエスの上に置かれた。
- iv. この地上での日々が終わり、永遠に足を踏み入れ、記録が開かれるとき。すでに処理されていない罪はないだろう。キリストの一度きりの犠牲によって、私たちはキリストの義の中で完全になることが保証される。
4. 最後に、18節では、キリストの一度きりの犠牲によって、他の犠牲が不要になったことが示されている。キリストの犠牲によって私たちの罪はすべて赦されたのだから、他の犠牲は必要ない。
- a. そしてこれは、著者が読者に向けて書いているものにとって重要な事実である。彼は、ユダヤ教やモザイク律法のいけにえに立ち戻ることが、彼らにとってまったく何の役にも立たないことを示そうとしているのだ。
- b. キリストを信じることによって、他の犠牲は必要ない。ユダヤ

教のやり方に戻ることは実を結ばず、愚かなことだ。ユダヤ教と彼らの古い宗教的なやり方は、彼らに提供するものは何もなかった。彼らに必要なものはすべて、キリストとの個人的関係の中に、そしてキリストとの個人的関係を通して見出されたのだ。

- c. それは私たちにとっても同じことだ。私たちがこの世で必要とするものはすべて、イエス・キリストとの個人的な関係の中に、そしてその関係を通して見出されるのだ。
- d. ペリピ4:19は、「私の神は、キリスト・イエスによる栄光の富にしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてください」と宣言している。(ペリピ4:19)。
- i. 欲しいものすべてではなく、必要なものはすべて供給される。
- ii. パウロは癒されたかった。パウロは、自分の肉に刺さったあるとげを取り除いてほしいと、三度にわたって神に懇願した。私の恵みは、あなたがたに十分である。(2コ12:9a)

- iii. キリストはパウロに必要なものを与えた。そして、その同じ恵みが私たち一人ひとりにも与えられている。
- iv. 神の恵みによって、私たちはキリストとその一度きりの犠牲によって、必要なものをすべて持っている。
- e. あなたのことは知らないが、私にとっては計り知れない祝福だ。私に必要なものはすべて、神の恵みによって与えられる。私はそれを獲得する必要はなく、功德を積む必要もない。ために主を賛美しよう、アーメン? アーメン! 祈りましょう。